

＜スタッフ紹介＞

役 職	スタッフ名
部長兼臨床研修副センター長 兼輸血・細胞治療センター長	釜江 剛
医 長	町田 朋久
副医長	上條 公守
医 員	久林 正斗

＜特色と概要＞

当院は泉南地域における唯一の日本血液学会認定血液研修施設であり、地域における血液疾患の診療を積極的に引き受けるとともに研修医や専攻医の指導に当たってきた。また、日本造血・免疫細胞療法学会の定める非血縁者間造血幹細胞移植認定診療科であり、血液悪性疾患や造血不全に対し自家末梢血幹細胞移植や血縁者間同種造血幹細胞移植のみならず、日本臍帯血バンクおよび日本骨髄バンクを介した非血縁者間造血幹細胞移植を実施してきた。1991年から移植治療を実施しており、2024年度には12例、2025年度は14例実施した。2023年10月にはCAR-T細胞(キメラ抗原受容体-T細胞)療法の一つであるキムリアの認定施設となり、2024年度は5例、2025年度は1例実施した。血液疾患の診療は医師だけでなくチームとしての実力が問われるようになってきており、看護師、薬剤師、理学療法士、検査技師と合同で他職種合同カンファレンスを行い、チームとしてより良い診療の実践を心がけている。また、同種移植後のがんサバイバーの生活の質の向上を図るために、認定看護師を中心とした移植後長期フォローアップ外来を行っており、さらに2025年度より移植後ワクチン外来を新設し、4例がワクチン接種を開始している。

【診療体制】

血液専門医の常勤医4人(その内日本造血・免疫細胞療法学会認定医1名)で外来診療を担当し、地域の医療機関からの紹介患者の診療や外来化学療法、輸血療法など多くの患者の診療にあたっている。このように医療体制および診療体制が整ったことで近隣からの紹介患者も増加している。また、止血機能異常症や化学療法の合併症等に関するコンサルトにも随時対応した。

入院診療は4名で担当した。20床の割り当て病床で稼働しているが、患者数の増加に伴い常時20床を超え、延べ患者数は10,318名であった。

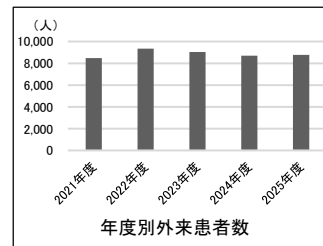
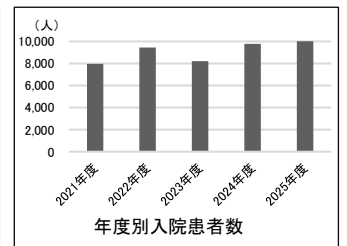
臨床研究・教育にも力を入れ、多くの講演会や学会発表を行っている。英文原著論文:1編の論文発表を行った。また、学会発表は、医師5件(うち、専攻医、初期研修医4件)、

理学療法士4件が行った。

＜実績＞

患者数(外来及び入院、延べ人数の推移) (人)

年度	外来		入院	
	延べ患者数	1日平均	延べ患者数	1日平均
2021年度	8,474	35.0	7,966	21.8
2022年度	9,342	38.4	9,449	25.9
2023年度	9,039	37.2	8,219	22.5
2024年度	8,701	35.8	9,783	26.8
2025年度	8,772	36.2	10,318	28.3



入院患者の疾患名と人数(主病名件数 上位 50 まで)

(期間 2025/4/1-2026/3/31 退院)

主病名(ICD10コード名)	ICD10	件数
急性骨髄芽球性白血病[AML]	C920	97
びまん性大細胞型 B 細胞性リンパ腫	C833	89
多発性骨髄腫	C900	25
急性リンパ芽球性白血病[ALL]	C910	21
非ホジキンリンパ腫	C859	18
急性前骨髄粒性白血病	C924	11
再生不良性貧血	D619	10
骨髄異形成症候群	D469	8
特発性血小板減少性紫斑病	D693	7
多系統異形成を伴う急性骨髄性白血病	C928	6
古典的ホジキンリンパ腫	C817	5
B細胞性リンパ腫、詳細不明	C851	5
びまん性リンパ腫	C839	4
マントル細胞リンパ腫	C831	3
B細胞性慢性リンパ球性白血病	C911	3
骨髄移植の拒絶反応	T860	3
急性白血病	C950	2
骨髄線維症	D474	2
骨髄異形成及び骨髄増殖性疾患	C946	2
リンパ組織、造血組織及び関連組織の性状不詳又は不明のその他の明示された新生腫瘍	D477	2
ALアミロイドーシス	E858	2
慢性骨髄単球性白血病	C931	2
後天性凝固因子欠乏症	D684	2
濾胞性リンパ腫	C829	1
葉酸欠乏性貧血	D529	1
その他の臓器及び組織の移植後の状態	Z948	1
濾胞性リンパ腫グレードⅢa	C823	1
成人T細胞リンパ腫／白血病[HTLV-1関連]	C915	1

＜今年度の成果と来年度への抱負＞

1. 常勤医の減少に伴い、外来枠の縮小を行ったが、外来患者数は維持することができた。その分、スタッフの負担は増加している。泉南地域は血液専門医数が大阪府平均の半分以下、全国平均の約半数であることから、地域の先生方とより連携を深め、逆紹介を促進し、専門的治療が必要な患者さんに効率よく医療を提供できる体制を作りたい。

2. 同種造血幹細胞移植術は目標件数を実施した。また、移植後長期フォローアップ外来に加え、2025年度には移植後ワクチン外来を開始することができた。同種移植後のがんサバイバーの生活の質の向上を図るために、来年度は移植後長期フォローアップ外来の更なる充実を図りたい。
3. 働き方改革に対応するために複数主治医制を導入した。これにより、医療の質の均一化が図られ、主治医不在時にも速やかな治療継続が可能となり、入院診療の効率化や延べ患者数の増加につながった。一方で、本来の目的である医師の休暇取得促進には結び付いておらず、さらなる運用改善が必要である。今後は、若手医師が出産・子育てと両立しながら、継続して臨床現場で活躍できる環境の整備を目指したい。